

文學大概

石川淳

中公文庫

中公文庫 ©1976

文學大綱

一九七六年二月一日初版
一九九一年四月三日4版

著者 石川 淳

発行者 嶋 中 鵬 二

整版印刷 三晃印刷

カバー トレープロ

用紙 本州製紙

製本 小泉製本

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋二一八一七

振替東京二一三四

ISBN4-12-200396-2

Printed in Japan

中公文庫

文學大概

石川 淳著



中央公論社

目次

文章の形式と内容

九

一 書かれたことばのはたらき

九

二 文章を殺すもの生かすもの

一五

三 文章の美について

二〇

短篇小説の構成

二七

一 なにが作品の長さを規定するか

二七

二 短篇とはなにか——その名稱のいろいろ

三六

三 短篇の領域

四七

俳諧初心

五六

江戸人の發想法について

七四

能の新作について

八六

虚構について

九一

雑文について

九九

悪文の魅力

一〇五

歴史と文學

一〇七

文化映畫雜感

一一三

ラゲエ神父

一二九

ことばと常識

一二四

牧野信一

一三六

あけら菅江

一三三

鷗外についての對話

一三七

ヴァレリイ

一四七

マラルメ

一五四

バルザック

一六一

スタンダル

一六八

アナトール・フランス

一七四

祈禱と祝詞と散文

一八〇

二葉亭四迷

一九七

岩野泡鳴

二三五

岡本かの子

二五三

解説

丸谷才一

二七六

文學大概

文章の形式と内容

一 書かれたことばのはたらき

まづきはめて平凡な二三の注意からはじめる。

われわれは日常、それについて考へてみると否とにかかはらず、ことばといふものを口に出してしゃべつてゐる。そして、ひとりごとの場合でさへ當人がそれを聴かねばならぬくらゐなのだから、しゃべることばにはつねに一人または數人の聴手が附物で、相互の間に思念感情の傳達がおこなはれることは今さらいふまでもない。すでに、しゃべられたことばは若干の當事者の間におこつた事件だとすると、そこに參加したことばどうしの間には、すぐ反撥しあふにしろ、やがて親和するにしろ、ともかく衝突、摩擦、抵抗が見られるはずである。もつとも日日の定まつた挨拶、通り一遍の式辭のたぐひ、もしくは取りとめない茶話のごときにあつては、ことばはほとんど無意味に暗誦されるか、はじめから狎れあふために振り撒かれるかして、右の抵抗の度合ははなはだよわく、ひとはべらべらと無價値の品物を投げるやうにしやべつてしまふ。しかし

なにかの要件に關する相談、責任ある陳述、談判、説伏、討論の場合など、受け應への弛みなき、表現の正確が要求されるにしたがつて、抵抗の度合がつよくなり、ことばの意味は明瞭にみがかれて出る。身にしてみる愛のことばもしばしば烈しい抵抗をへた後に發せられる。つまりことばはそれが單にしゃべられるときといへども、充實した意味をもち、一定の内容を含蓄するためには、勝手にしゃべりまくらうとする當人の意圖にかかはらず、口から出たとたん外部の諸條件（右にあげたものは卑近な例）によつてたたき上げられてゐるといふことだ。この外的條件に逆行したせつには、バカなことをいふなとか、なにをいつてゐるのか判らないとか、通用力を否認される。げんに、白痴、狂人、泥醉者、ヒステリイ女の放言の類は人間一人前の満足なことばとして受け取られない。同様に、ときとして非凡なことばは世間に理解されないといふ憂目に逢はされる。

さて、なにかの意味をもつ一聯のことばが文字で記されるとき、すなはち文章が書かれるときそこにどんな抵抗がおこるか。（スタイルと物質的條件とについてはアランがみごとな説を述べてゐるが、ここでは高きに登るに先だつて、しばらく初歩のところを見直したい。）棒きれで水の面や風の中に劃されるいくつかの字形を、われわれは文章とはいはない。第一に、ペン、筆、鉛筆、もしくはタイプライターといふ道具をもつて、墨かインクで實形をあたへられた文字に於て、手は紙の上のことばを書かなければならぬ。われわれがふだんなにげなく取扱つてゐるこれらの物質こそ、ことばが文章として實現されるために、劈頭からぶつからずにはすまぬ曲者である。たしかに、これらの物質どもは人間の發明によつて征服されたもの、しかもとくにことばの力にしたがふべく待機してゐるはずのものでありながら、逆にかれらのはうで網を張つて人間の

ことばを搦め取らうとするやうな、時と場合では突き返さうとするやうなけはひである。かれらの物質力の總和が文字といふもので現前してゐるのに對して、人間は文章を成立させるためにこれを再征服しなければならぬ。ことばが單にしゃべられてゐる限りでは、かかる難關に遭遇することもなく、またかかる武器を把持しうることもない。いち早く、もうこのへんから、しゃべることばと書くことばとの相違がちらちらし出してゐる。文章はしゃべられたことばを文字で撮影したものではないので、筆記された談話、速記された演舌のたぐひはつひに文章ではない。しゃべつただけで文章になつてゐるなどと評されるものは、じつは韻文か雄辯かである。盲目の馬琴の口述筆記がいちじるしい例である。ところで、しゃべるやうに書くといふスローガンがあつてそれこそ散文的だと解されてゐるらしいやうさへ見える。だが、文章のはなしは微妙複雑をきはめるものなので、ちよつと順序が前後しただけでも、たちまち混亂を生じて、誤解曲解を招く危険があるから、その件については追つて後段で説くことにしよう。

ことばが文字であらはされることになる、文字には文字の法があり、文章には文章の法があつて、それがことばのはたらきを緊密にさせて来る。もちろん、なにかの法則が前もつて勝手に設定されてゐて、ことばに有無をもちせぬ仕掛になつてゐるわけではなく、そんな法則こそことばの歴史上おひおひに整頓集成された習慣法にはかならぬものではあるが、すでにそれが出来上つてしまつた以上、便利にしろ不都合にしろ指針の力が幅をきかせて、たとへこれを打破して新風を開かうとする鬼つ子文章といへども、あたまから相手を無視してはかかれぬ仕儀である。このやうな段階には、しゃべることばは直接には乗り上げて來ない。ひとは文章の法則の存在を

承知してゐながら、日常はそれから分離してふんだんにことばを吐き散らしてゐるが、さあいましやべつたことを書いてみると、紙を突きつけられると、急に姿勢が改まつて、顔つきまでよそ行きに變つて来る。文字がないのか、筆が立たないとか、いやに物質をだしに使つたいひわけがその間の消息を語るもので、筆無精だが口は達者といふのがさらに見かける例である。

書かれたことばはそれにふれる人間のどこをいきなり打つて来るか。眼である。眼を通して理性に呼びかけると同時に感覺に訴へるといふ行き方は、これまたしやべることばが決して經驗しないものだ。この交渉があまりに平明におこなはれてしまふために、ひとはややもすれば文章はかならず黙つて眼で讀まれるべきものだといふ單純な約束を忘れがちなのであらうか。眼を通しての感覺といふことでは、文字のかたちそのものもまた問題になりうる。ここでは除外しておくが、縦書にされる象形文字といふ圖形と、横書にされる音標文字といふ符號との相違はやがて東西の文章の構成にも影響するはずである。おまけに東洋の文字には奇妙な因縁が擲んでゐて、毛筆で描かれた字形は書といふものに化けてしまひ、ことばから遊離したところを珍重され、書に人間が出るとかいふ卜筮の術まで突出され、書道と稱する信仰が藝術あつかひされてゐる。それはそれで別のおもむきがあるとしても、文章にとつては餘計な派生物であつた。おそらく、文字から心理の垢を洗濯する活字の效能を、一番痛烈に感得したものは東洋の文章であらう。散文の最後の決定的のかたちは活字だとアランがいつてゐるが、一見無味乾燥なことばを文章の性質への暗示として、ひとは噛みしめなければならぬ。

ことばはただしやべられただけでは、たとへ萬人にむかつてさけばれたものにもしる限られた

人數の耳にしか聽かれない。それが萬人に行きわたり、音が消えた後にも残りうるためには、かならずどこかで記録されてゐなければならぬ。しかるに、一度文章に書かれてしまつた以上は、たとへ一人きりの相手に内證で傳達されることを目的としたものにもしろ、そのことばはすでに萬人に屬するはずである。いはば、文章はつねに活字の一步てまへ、もう一息で活字になるといふ瀬戸ぎはに立つてゐる。けだし、ひとは心理だけでも御方便にことばをしやべることはできるが、文章は精神抜きでは一行も書くことができない。祕密の精神といふものがないやうに、それが文章である限り、戀文でも、無心狀でも、つひに内證の文字ではない。こそこそ書くのは駄文にきまつてゐるので、はづかしくてとてもひとさまにはお眼にかけられませんと、自分で白狀してゐる。戀文が相手を打つのは、綴られた思ひのたけの色合、假名遣の正否、字形の巧拙などではなく、全體を震撼させてゐる精神の作用で、そこにまた赤の他人まで感動させられるのだからゐることはことわる要もあるまい。(それにしても、やはり假名遣なども正しいはうが精神が引き立つてよささうだ。)北村透谷が後の夫人に書き送つた烈たる文字など立派な實例である。

紙の上に印された文字は萬人の眼に入るべきもの、さうして出来上つた文章は萬人に屬すべきものとはいへ、そこに書かれてゐることばはもちろん國國によつて相違する。この國語の特殊性は實際に文章の地理的流通を不便ならしめてゐるが、しかし、それはつねに普遍へ伸びようとする文章の性向をねぢ曲げはしない。何としても、國土のことばと文章とは切つても切れない因縁にあるのだから、國語の特殊性は文章にとつてぎりぎりの生き場所である。むしろ、その特殊性に徹したところで、文章の普遍は顯現される。フランス語の「血」といふことばには全フランス

人の血が流れてゐるが、エスペラントの「血」にはこの人間の血も通つてゐないと、アナトール・フランスがいつてゐる。たしかに、エスペラント思想が各國に蔓延したとしても、われわれを感動させるものはエスペラント作文ではなく、かならず人間の血の氣がある文章にちがひない。だが、ともかく文章の側から見れば、それが一行でも成立するためには、どこか特定の國語に限るといふ必然の約束がある。

このことはまた、國土の風土性が文章のはたらきに影響するといふことを示してゐる。いや、一般には、自然が行手に立ちふさがつてゐて、そこに自分の道を切り開いて來る文章の刃先に對し、硬い手應へを思ひ知らせるけしきである。また一篇の文章はそれを書いた個人の手から獨立して、萬人の間におこつた一事件となるので、ここでは社會が相手である。すなはち、人間および人間が編み出した諸發明との關係に入りこむと同時に、それらによつてはたらきを限定されなければならぬ。個人の制作にかかはる限り、文章は個性的な價值をもつとしても、それはもう一つ別の場所で、たれかの手で目方を量られ、位置をきめられる運命を免れがたい。文章は存在でもあり、現象でもあつて、自分が文化を構成する要素でありながら、いつか文化に食はれてしまふ成行となる。そのことは文章の力の振幅を示すものだが、また一本立の文章が出來上る手續の困難を語つてゐる。

以上略述したところを一括すると、人間のことばが文章に於て實現されるとき、そこに物質、自然、人間の諸發明による抵抗がおこるといふこと、それらの制約が課せられるといふことだ。この避けがたい制約を前にして尻ごみしたのは一行も書けぬ。まさしく、ことばにとつて、す

なはちことばに示現する精神にとつて、これはやつかい千萬な制度であるが、この強制に於てしか人間の精神は解放されるすべをもたぬ。また、この強制よりほかに、ことばのはたらきが生かしきられる場所はない。一篇の文章が出来上つたとき、全體が意味するものと不可分な關係に於て、そこに展開された精神の格闘の跡が生命ある文字の像として、紙の上に自立する。それを文章の形式といふ。

二 文章を殺すもの生かすもの

しやべるとき、とくに表現の嚴密が要求される場合のほかは、ひとはほとんど無考へでことばを吐き散らしがちである。ことばのほうに先に飛び出して、いひあらはずべき事柄のまほりをぐるぐる舞つてゐるふぜいで、首尾よく急所を突きあてるか、あるひは當てずじまひか、一つ文句を何度もくりかへしたり、しやべるそばからいひ直したりしてゐる。一氣に事物の核心を突いたことばは名言として珍重される。文章では、書いてしまつた以上もうそれきりで、いひわけなど許されない。一つの事柄はいろいろな角度から見られるので、したがつていろいろな表現があるはずだとしても、書きうる表現はつねにただ一つに限られてゐて、それがよからうとわるからうと、ここでは一本勝負だ。ことばはかならず理性の吟味をへなければならず、それゆゑにかならず的確だといふやうな都合なはこびにはなつてゐないが、ともかく書いてしまへば百年目だといふところに文章のきびしさがある。すなはち書くことばはいつも選擇されなければならぬ。